論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文提出者氏名：宮本久雄

「われ」から出発する近代哲学において「他者」問題は一つのアポリアであった。「われ」が「われわれ」という普遍妥当的な主観性一般へと解消されるとき、他者は単なる「もう一つのわれ」とされて「われ」へと回収され、本来的に「われ」とは異質な固有性をもつべきはずの「他者性」が見失われるという事態が生じてしまうからである。フッサールやブーバー、レヴィナス等が、それぞれの立場から他者経験の間接性、汝との出会い、絶対他者などをめぐって哲学的考察を行ったのは、自我の肥大化がもたらす暴力に対抗しうる他者性の回復が現代においていかに可能かというアクチュアルな問題とかかわっていたからである。

宮本氏は、他者忘却と喪失の哲学的立場であるいわゆる理性的ロゴス中心主義を「存在ー神ー論」（Onto-theo-logia）と位置付けしなおすことによって、その系譜をデカルトやカント、ヘーゲルなどの近代哲学にのみ限定せず、広く古代から中世の各種テキストを柔軟かつ鋭利な読解を行うことによってその本質と弊害を見極めるとともに、それにとどまらずさらにこれを超克する「他者の原トポス」の鉱脈を探り当てることに成功している。ここにいう「存在ー神ー論」とは、氏によれば、「存在」が「存在者」によって隠蔽され、その結果「存在」の代わりに神や一者などの「第一存在者」が存在界を根拠付けるに至り、さらにこの第一存在者の座を人間の表象的主体が簒奪し、技術力を駆使して存在界を全体主義的に支配する事態を招来し、ついには現代の「ショアー」を惹き起こす契機となった哲学的立場を指す。これに対し、氏は、自己の成立というものが自助的努力によるのではなく、むしろ「他者」との出会いによってはじめて行われうることに注目し、閉塞的な「われ」を打開し「他者」の呼びかけに出会いこれに聴き随うことに「存在ー神ー論」を克服する鍵があるという視点を導入する。「原トポス」とは、一方で近代成立以前の哲学的ないし神学的テキストにみられるこの出会いの原点的在り処を指示するとともに、他方でその出会いと思索が生起する根源的な場を意味し、それはそこから思索が胎動し生命が湧出するロゴスの場であると同時に、そのロゴスを体悟体現した個人であり、そこに生まれる伝統を踏まえて成り立つ人間同士の交わりの場と考えられている。このように、氏は、日常底の生活やテキスト、あるいは他者忘却の場というトポスを突破し、他者との出会いによって思索と生がそこにおいて始まり展開する根源的な場・トポスとは何かを問い、「他者の原トポス」という観点のもとに新たな存在理解の地平を開明することを目指している。

本論「存在と他者のトポスへ」は、序論「他者と存在ー神ー論」の以上のような思想的展望を踏まえて、「存在ー神ー論」を超克する形で再度「存在」、「神」、「論」（ロゴス）を各思想家の言説に照らしつつ哲学的に検討する第１部、超越的他者としての神をヘブライ・キリスト教思潮の地平で神学的に検討する第２部の２部構成となっている。以下、論文の構成に即し、氏の議論を要約する。

第１部「原トポスの哲学 ― 教父・中世哲学と他者」は、学知的言語の確立以前と以後にそれぞれ成立した教父と中世期の哲学的テキストを考察の対象とし、そこに見られる「存在―神―論」を超克する哲学的系譜が探究される。第１章「ニュッサのグレゴリオス」は、４世紀のギリシャ教父であるグレゴリオスの『雅歌講話』が考察の主な対象として取り上げられる。モーセがシナイ山で神と出会う出エジプト記の記述に、無限存在である知られざる神との一致に向かう人間の聴従的で無限背進的な自己変容（エペクタシス）を寓意的に読み取ったグレゴリオスが、本質（ウーシア）と働き（エネルゲイア）の存在論的区別

を踏まえながら『雅歌』の花婿と花嫁の相聞において絶対他者との人格的交わりの地平を拓いたことが論じられ、ヘレニズム的本質主義とヘブライ的現実理解の統合がここに豊かに結実したことが指摘される。第２章「アウグスティヌス」は、５世紀のラテン教父アウグスティヌスの『告白』が主に取り上げられる。彼の回心体験の核心には受肉したロゴスとの出会いがあり、それは自己を無化すること(ケノーシス)によってはじめて魂ばかりではなく身体性をも含めた全人間的なレベルでロゴスが転位し新たな生命のことばを鳴り響かせ、さらには個を超えた共同体的な交わりを可能にされたことが論じられ、「告白」という行為が実は他者にすでに知られていた自己が他者を知ろうとする自己無化と自己開被のいとなみであることが明らかにされる。第３章「トマス・アクィナス」は、スコラ学の大成者である１３世紀のトマス・アクィナスの『神学大全』における存在理解の問題が取り上げられる。哲学史的にはトマスは「存在―神―論」の完成者と見なされるが、氏は彼の神学に存在（エッセ）と存在者（エンス）との存在論的差異があることを指摘し、神聖四文字をめぐる神名論や否定神学による理性の超越論等の検討によって、学知的判断を超えた他者の現実性の開被があることを論証している。１４世紀の神秘思想家エックハルトのドイツ語説教５ｂが考察の対象とされる第４章「マイスター・エックハルト」では、説教言語の背後にトマス的な学知的言語が伏在していることがまず論証され、存在に対する彼の無の理解が個人の実存的な自己否定と共同体的な生の連帯の根底となっていることが例証されている。

第２部「原トポスの神学―ヘブライ・新約思潮」においては、他者ないし他者の根拠としての神がユダヤ・キリスト教教典のテキストのなかでどのようにふるまいかつ語られているかが探究され、神の死以後の現代にあって「存在―神―論」がもつ内在的還元主義がいかに乗り越えられ、他者の地平を拓きうるかが論じられる。第５章「他者（アダム）の誕生と喪失 ―『創世記』に即して」は、『創世記』の天地創造からノアの洪水に至るテキスト構造分析を踏まえて、「無からの創造」という創造理解の根底には他者を迎えるという仕方で自己充足から脱自する神の対面的動態があり、根源悪とはその他者の喪失とかかわることが論じられる。第６章「ハーヤー存在論と他者のエチカ ―『ルカ』の「善きサマリア人の譬え」より」では、異邦人であるサマリア人によって律法的な全体主義が乗り越えられるイエスの譬え話の解釈を介して、根源悪を突破する出会いのエチカの在り処としてハーヤー的他者が検討され、神が不変不動の永遠的自己同一者ではなく、自らの彼方へ向けて不断に新たな境界へと脱自していく動態であることが指摘される。第７章「死と甦り―『マルコ』の空虚の墓の物語より」は、イエスの復活と空の墓の物語がはらむ死の問題が取り上げられ、死に直面したイエスの自己無化がなんら外的保証のない形で父なる神への聴従にあったこと、それはとりもなおさず父なる他者を迎え入れることであったことが示され、そこにこそ復活という生命の新たな創生という地平が拓かれることが論じられる。最終章の第８章「プネウマ言語と他者の記憶―『ヨハネ』１３－１７章」は、受難物語をイエスのショアーととらえ、このトラウマに弟子たちがいかに向き合ったのかという問題を扱い、動的な他者の深みを披き、過去の忘却を甦らせ未来的な希望を創造し、自然の変容をももたらすプネウマ言語に「存在―神―論」を突破する地平を見る。結論「むすびとひらき」は、以上の議論を踏まえた上で、原トポスの否定としての「ウートポス」が促す思索の地平が指摘されている。

本論文は、以上のようにヨーロッパ精神史を形成した複数の重要なテキストを取りあげ、「存在―神―論」の克服と新しい思考の構築というテーマを「他者の原トポス」という立論から一貫して追及し、独創的な解釈を随所に示しながら、従来にないまったく新しい古典文献学的、哲学的な理解と解釈を提示している。また、たとえばショアーにみられる根

源悪というきわめて現代的な問題意識から古典的テキストを読解するという姿勢に貫かれており、さらに自己を超克しつつ新たな自己を開示していくというハーヤー的存在の力動的なあり方が言語に呼び寄せる魅力的な造語と思考のダイナミックな構築にみちあふれており、哲学＝愛智の原点へと立ち返らせる稀有な書といえる。

なお、本論文に対し、将来的展望も含め、次のような問題が審査委員から提示され応答された。第１に、絶対的他者と相対的他者の区別が明確にされていないきらいがあるため後者の占めるべき位置が不分明となっているのではないかという疑問点に関しては、相対的他者が絶対的他者を披く場について今後より詳しい議論がなされるべきことが確認された。第２に、創世記の分析において聖の秩序ばかりでなく汚れの秩序についての考察もなされていれば、創造秩序の中にすでに異物が含まれていたことが一層明確になったのではないかという指摘がなされたが、これに対してはポリフォニーとしての聖書解釈という視点の重要性が確認された。第３に、ロゴスの転移に関する議論において、良き回収と悪しき回収があるように記述されているが、回収には洩れ落ちる事態が必ず付帯するという視点が充分議論の対象になっていないという点が注意された。また、仏教などの東洋思想との比較をもう少し取り入れて論述しても良かったのではないかという指摘もあった。しかし、本論文が、学界に画期的な学問的貢献をすることは確かであり、指摘された箇所は本論文の瑕瑾とするにあたらないというのが審査委員全員の意見であった。

したがって、本審査委員会は、全員一致して、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。